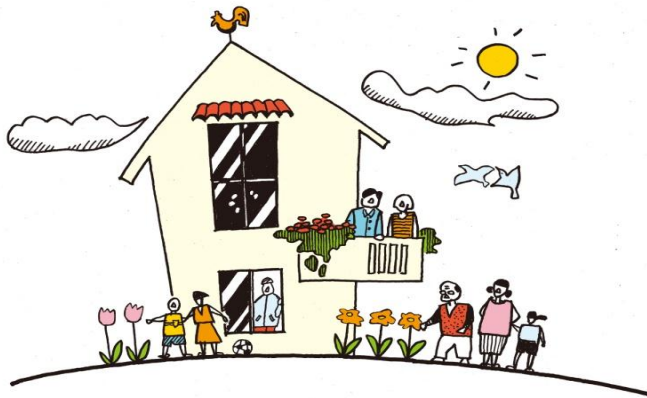


GLnet 会報

「お年寄りが幸せに暮らせる社会を作る活動」 & グループリビング運営協議会

NO.1
2012年10月10日
発行所 *NPO法人いぶりたすけ愛
〒059-0233
北海道登別市桜木町2-20-10
TEL 0143-88-3003
発行者 星川光子

地域力を結集していこう！



NPO 法人 COCO 湘南 理事長
グループリビング運営協議会
名誉顧問 西條 節子

地域力を結集していこうと活動している皆さんの姿をみるにつけ、今やらなければ間に合わないことに国や各機関が気づき始めてくれたと思っています。住み慣れた地でその風土を活かして元気印に安心生活がつかれることを願っています。私たちはノウハウを惜しみなくおわけするでしょう。なぜならば私自身、地域住民として暮らすグループリビングの住民で生活歴 14 年目となり、安心と元気印で生活しているのです。

グループリビング運営協議会 会員募集中

目的

グループリビング運営者や運営者をめざす団体、個人の相互支援、相互啓発とともに、全国に向けてグループリビングの普及啓発活動、調査研究等を行い、我が国における豊かな高齢者居住の推進に寄与することです。

事業内容

- (1) グループリビングの支援・相談
- (2) ワークショップの開催
- (3) ホームページの運営
- (4) グループリビングの調査研究
- (5) その他、本協議会の目的を達成するために必要な事業

■グループリビング運営協議会 連絡先

土井原奈津江 NPO 法人 COCO 湘南内
〒252-0804 藤沢市湘南台 7-32-2 NPO 法人 COCO 湘南内
TEL 0466 - 46 - 4976 ・ FAX 0466 - 42 - 5767 (1PM~5PM・平日)

グループリビングの輪を広げていきたい



JKA 補助事業
「お年寄りが幸せに暮らせる社会を作る活動」
事業主体
NPO 法人いぶりたすけ愛
理事長 星川 光子

高齢者生き生きグループリビング「たすけ愛の家」は、早いもので7年目となりました。生活者の元気に励まされ、作って良かったと感じています。生活者の「私達は、グループリビングに住んで幸せに暮らしています。この幸せを多くの高齢者に分けてあげたい。」という声に動かされ、微力ながらもグループリビングの発展のために力を尽くしたいと思っています。

今年度発足した、グループリビング運営協議会では、全国各地でグループリビングを運営されている団体との情報交換、そして、これから作ろうと考えている方々と一緒に勉強できることを楽しみにしています。「自立と共生」という大きな目標に向かう仲間同士、助け合い、励まし合ってグループリビングの輪を広げていきたいものです。

★NPO法人いぶりたすけ愛が「北海道に『自立と共生』を広める活動」を行います！

NPO法人いぶりたすけ愛が北海道新聞社会福祉振興基金で「北海道に『自立と共生』を広める活動」を行います。活動の目的は①北海道内にあるグループリビングの情報交換を通して、互いの連携を図ること。②北海道内の他のグループリビングの生活体験を通して、生活の向上を図ること。生活者の主体性を高め自ら生活を作り上げていく気力を高める。③グループリビングの周知の方法を知ること、です。第1回目は「研修会IN釧路」で釧路のグループリビングの「ほがら館」で10月14日～16日に行います。他のグループリビングの生活者が参加し生活体験を行い、その後意見交換を行います。この活動はJKA補助事業「お年寄りが幸せに暮らせる社会を作る活動」と慶応義塾大学SFC研究所地域協働・ラボが協力して行います。

「住まい」から生まれる「人」と「人」のつながり

立教大学大学院
コミュニティ福祉学研究科
博士課程後期課程
星野 友里



1 「住もう」とは

「衣食住」という言葉が示しているように、これらは私たちが毎日の生活を送るうえでの重要な要素である。いずれか一つでも欠けてしまえば、生活が忽ち立ち行かなくなることはいうまでもない。特に、住宅はそれを取得した人々が支配出来る物理的な空間であるということを超えて、「そこに住もう人びとの生活がそれによって規定され方向づけられる住まいの空間」である（古川孝順 2011：9）。今後、高齢化の進展にともない、高齢者向け住宅の需要が増すという見方があり、シルバーハウジングやケアハウスもその一種だといえる。しかし、鈴木晃（1999）は、これらが「ニーズを漠然と想定している」と問題視する。なぜなら、必要とする支援は個人によって異なり、居住者を一つの集団とみて、一様に対応するのは困難だからである（鈴木 1999：38-39）。高齢者を主な対象とした住宅だとはいえ、例えば、年齢や身体的な状況によって要求するサービスの種類は大きく異なるはずである。さらには、状況は常に変化していくものであり、去年と同じサービスを今年も同じく必要とするとは限らない。したがって、自分に最も相応しいサービスを受けるためには、利用者の立場に立った頻繁な見直しが求められる。

また、住むという行為は、人間発達の諸段階に対応したさまざまな生活行為の行われる場であり、生活を支える施設に加え、「居住地の住人によって形成されるコミュニティ」が意味を成すところは大きい（早川和男・岡本祥浩 1993：7-8）。ところが、私たちの多くは「住む箱として・物として」家を選び、隣近所のことなど念頭にないのが実情である（宮前眞理子・狩野三枝 2004：138）。「家」という「住む箱」を手に入れることにばかり気を取られ、その周囲のことに関しては素知らぬ顔をしがちだ。しかし、「住もう」とは、地域の住民としてその場に溶け込むことであり、そこに存在しているだけでは不完全だといえよう。そのため、「住む箱」から一步を踏み出し、自分の周りの人および環境を組み込んだ「暮らし」を構想することが望まれる。

2 「人」から始まる住まいづくり

そうしたなか、住人らが中心となった住まいづくりも少しではあるが行われており、上野勝代（1996）は、それらを「高齢者向け住宅の整備が遅れているわが国における、自衛手段としての相互扶助的な住宅づくり」だと評価する（上野 1996：201）。自分の希望する暮らしが既存のものに当てはまらなかったことが、独自の住まいづくりのきっかけとなることも多いと聞く。そして、その過程では、「自分自身の空間や他人との主体的で持続的にかかわり」が必須である（小谷部育子 2004：9）。例えば、宮前・狩野（2004）は「コレクティブハウス・かんかん森」の実践から、「自ら暮らし方を選択し、経営・運営していくという意識をもつことが、自分らしい暮らし方を手に入れる第一歩」だとまとめている（宮前・狩野 2004：139）。住まいは、継続的に快適さを感じられるものでなければならない。そのため、入居後の生活を見越して、「住宅づくりとともに住む仲間づくりを慎重に時間をかけて検討する意義は大きい」（大橋寿美子 2002：122-123）。人々の暮らしはそこに住もう人が中心であることが理想である。

これに関して、住人たちの良好な関係を築くのに重要な役割を担うのが「コモン」という領域である。コモンはグループリビングやコレクティブハウスといった共住形式の住まい方のほか、一部のマンションやシルバーハウジングなどにも設置されている。しかし、甲斐徹郎（2009）は、マンションなどに整

備されているそれは、「その領域の個人的な活用が、予め制限されている場合が多い」と指摘する（甲斐 2009 : 53）。こうした状況のなかで、住人たちのあいだにコモンを活用しようという意識が生まれるはずもなく、そこは単なる空間でしかない。独立した住戸にコモンを備え付ければ、共生関係が自然と育まれるということはない。設備面に加え、住人の積極的な関わりが併せて必要だ¹⁾。何のためのコモンなのか、運営者側と住人側が一緒になって再考するべき時がきている。

集合住宅内のコモンを交流の場にしてもいい。あるいは、サロンやコミュニティカフェのような場を住まいの外に持つこともいいだろう。いずれにしても、何らかの形で、窮屈さと寂しさを感じない程度に『人』と『人』がつながること」を私たちは欲しているのではなかろうか。

3 「人」と「人」がつながること

特に、高齢者が心身の衰えを感じたとき、まず直面するのは「見守りの不安」である。しかし、介護保険ではカバーされない部分であるがゆえに、結局は施設探しに奔走することになっているのが現状だ（園田眞理子 2011 : 59）。今後、人と人のつながりの意味が増すことは前章で述べたが、それをもつことが上記のような状況に対する一つの突破口になると筆者は見ている。

ひとり暮らし高齢者の増加がしばしば語られているが、篠原聡子（2002）によれば、選択してそうなったのか、結果としてそうなったのかを比べれば、後者の方がより多くの問題を孕んでいる恐れがあるが、どちらにせよ、「家族に代わる新たなネットワーク」を必要としているという点は同じだという（篠原 2002 : 153）。ただし、そのネットワークは地縁や血縁に限らず、比較的自由度の高いものであることが望ましい。例えば、上野千鶴子（2002）は「居住の近接が強制するようなコミュニティではなく、“選択性”のあるコミュニティ」を提唱している（上野 2002 : 190-191）。すなわち、それは、自分が無理なく付き合える相手とのコミュニティだと言い換えることができるだろう²⁾。また、同様に、グループリビングの実践者である西條節子（2000）も、住人が 10 人いれば「自分と適度に相性の良い関係がもてる人」が見つかる」と述べている（西條 2000 : 39-40）。全員が仲良しである必要はなく、「人と人との風通しのいい関係」を築くことこそが求められているのである（宮前・狩野 2004 : 110）。

しかし、人と人が集まれば、トラブルが発生するのもまた事実である。そのため、一人で住むほうが気楽だという結論に至っても何ら不思議はない。これに対し、高橋英與（1998）は、「トラブルが起きるのは、結局人間が活着しているということ」だと肯定的に捉え、規制で縛るよりも個人の自由を尊重する姿勢を見せている（高橋 1998 : 145）。誰しもが、自分の人生は自分の望むように生きたいと願うものである。衝突することもあるだろうが、最終的にはそれぞれが納得のいく形に収まればいい。こうした「風通しの良さ」というのは、毎日の生活のなかで徐々に磨き上げていくしかないもので、定型化したものはどこにも存在しないのである。

ここで、応用的な事例を一つ挙げるとしよう。グループリビング A では、委員会のメンバーとしてその計画段階から関与してきた数名が、開設後すぐに入居はせず、各々の形でグループリビング A との関わりを継続するという形をとっている。彼女らの選択を疑問に思うものもあるかもしれない。しかし、グループリビングの建物の完成、あるいはそこへの入居がゴールではないのである。それよりも、計画に加わり、自らの暮らしについて考えること、それ自体が有意義な行為だといえまいか。この事例は、共に住まうことだけが「つながる」方法ではないと示唆している。

4 その人なりの暮らし方の実現に向けて

本稿の冒頭にて、己に適した居住空間を構想することの必要性を説いた。血縁者との同居やひとり暮

らしが大多数を占めるなかで、それとは違う道を選択した彼ら彼女らは、自分の暮らしに関して強く意識している方たちだといえるだろう。ただし、くれぐれも誤解のないように述べておくが、A が正解で B が不正解というような一律的なものの見方をするつもりはない。なぜなら、A にするのか B にするのか、それを決めるのは一人ひとりだからである。その人にはその人なりの暮らし方があってよい。

高齢期には、地域社会が生活の中心となりやすく、住まいがそうした人々の生活に与える影響は今まで以上に大きくなる。そして、そうしたなかで、若山和生（1996）は、「高齢期のライフスタイルに応じて選択される住まいと住まい方は多様化し、『高齢者住宅』居住はその選択肢の一つとして存在していく」と予想している（若山 1996：61）。ただ、残念なことに、積み上げられてきたものが極少数であるがゆえに、それらが人々の選択肢に成り得るほどの市民権を獲得できていないのが現状である。『知っているが選択しない』のと、それを『知らないので選択しない』のとでは大きく異なる」のであり、まずは、グループリビングを初めとした「その他」の住まい方を多くの人に知ってもらうことが急務だと考える（星野友里 2012：33）。また、グループリビングという住まい方を社会の枠のなかで捉え、且つ、外に発信していかなければ、その実践がいくら優れていたとしても、結局はグループリビングという住まい方も「少数派の選択」のなかに埋もれてしまい、高齢者の住み替え先あるいは多様な住まい方の選択肢となりえない。そこで、それらに社会性を加味するために、地域に情報を発信する（知ってもらう）仕組みの検討が必須である。

グループリビング運営協議会の今後の啓蒙活動に期待したい。

【注】

¹⁾ ただし、住人の状況によってはそれが難しいこともある。

そこで、宮本美奈（2001）は、元気な層が多い多い設立当初やコレクティブハウジングのような取り組みを進めていくにあたっては、「入居者への直接ケアより、むしろ入居者間の交流をはかるためのしくみづくりや地域との交流を積極的に行うグループワークやコミュニティワークの要素が求められる」と述べている（宮本 2001：178）。また、大橋（2002）は、シルバーハウジングにおいても、LSA（生活援助員）の「人と人をつなぐコミュニティ形成を促す工夫」により共同性が上がるとしている（大橋 2002：119）。

²⁾ その場合、「誰にも選ばれない人」が出てくる恐れがある。今後、検討していくべき課題だといえよう。

【引用・参考文献】

- 星野友里（2012）「グループリビングの可変性に関する一考察」『コミュニティ福祉学研究科紀要』第 10 号、pp.27-36
- 園田眞理子（2011）「高齢者の居住の諸相と問題解決に向けて」『社会福祉研究』第 110 号、pp.55-61
- 古川孝順（2011）「人間らしく『住まう』ことを支援する一居住支援と社会福祉—」『社会福祉研究』第 110 号、pp.8-17
- 甲斐徹郎（2009）「豊かな高齢社会を構築するためのライフスタイル再考」『都市問題』第 100 巻第 9 号・2011 年 9 月号、pp.49-57
- 小谷部育子（2004）「第 1 章 コレクティブハウジングの現代的意味と成立条件」小谷部育子編著『コレクティブハウジングで暮らそう—成熟社会のライフスタイルと住まいの選択—』丸善株式会社、pp.1-43
- 宮前眞理子・狩野三枝（2004）「第 3 章 日本における本格派コレクティブハウジング第一号—『コレクティブハウスかんかん森』」小谷部育子編著、前掲書、pp.85-143
- 上野千鶴子（2002）『家族を容れるハコ 家族を超えるハコ』平凡社
- 大橋寿美子（2002）「1 章 家族の現在と家族のかたち 2 節 拡大する家族 III 協同する家族」篠原聡子・大橋寿美子・小泉雅生＋ライフスタイル研究会編著『変わる家族と変わる住まい—＜自在家族＞のための住まい論—』彰国社、pp.106-129
- 篠原聡子（2002）「2 章 変わる家族のための住まいのかたち 1 節 変わる住まいの計画論 I 個を居住単位として考える」篠原聡子・大橋寿美子・小泉雅生＋ライフスタイル研究会編著、前掲書、pp.152-167
- 宮本美奈（2001）「シルバーハウジングにおける生活支援と今後の課題」『ソーシャルワーク研究』第 27 巻第 3 号、pp.174-180
- 西條節子（2000）『10 人 10 色の虹のマーチ 高齢者グループリビング[COCO 湘南台]』生活思想社
- 鈴木晃（1999）「高齢者の住宅問題の一般化—二つの選択肢とその課題」『都市問題』第 90 巻第 12 号・1999 年 12 月号、pp.29-42
- 高橋英典（1998）「生活科学研究所のシニアハウス運動」駒尺喜美・生活科学研究所共著『老いの住宅大作戦—手作りシニアハウスのすすめ』三省堂、pp.121-182
- 上野勝代（1996）「コ・ハウジングの展開」早川和男編集代表、岸本幸臣・鈴木晃編『講座現代居住 2 家族と住居』東京大学出版会、pp.181-204
- 若山和生（1996）「高齢者住宅市場の将来展望」『都市問題』第 87 巻第 5 号、pp.53-70
- 早川和男・岡本祥浩（1993）『居住福祉の論理』東京大学出版会

今年度の JKA 補助「お年寄りが幸せに暮らせる社会を作る活動」の事業内容

- ・ホームページ（GLnet）でグループリビング等に関連する情報提供
- ・会報の発行
- ・グループリビング運営者、これからグループリビングを作りたい人等への情報提供、相談
- ・ワークショップの開催
- ・社会に向けてのグループリビングの啓蒙と普及活動

NEWS

4月12日

今年度の財団法人 JKA 補助事業「お年寄りが幸せに暮らせる社会を作る活動」（旧全国高齢者生き生きグループリビング支援事業）は NPO 法人いぶりたすけ愛に決定しました。決定額は 1,218,000 円（補助額 3/4、自己負担額 1/4）。今年度のグループリビング運営協議会はこの活動を全面的に支援します。

5月15日

グループリビング運営協議会の一般募集を始めました。

速報 ワークショップ開催日程決定！

今年度のワークショップの日程が決定いたしました。2013 年 2 月 23 日（土）、24 日（日）の 2 日間、横浜市で開催いたします。詳細は 11 月中旬までにホームページ GLnet にアップします。

ホームページ GLnet のお知らせ

ホームページ GLnet は JKA 補助事業「お年寄りが幸せに暮らせる社会を作る活動」で運営しています。月一度 HP を更新し、先駆的なグループリビングの活動や研究成果を掲載しています。

<http://glnet.sfc.keio.ac.jp/>

編集後記

初めての会報発行ですがいかがでしたでしょうか。グループリビング運営のように皆様のご意見をお聞きしながら柔軟に変化させていきたいと思ひます。どうぞご意見、ご感想を事務局までお寄せください。（な）

編集委員 星川光子 土井原奈津江 星野友里